



南の島の小さな喜び ——キルト作りをとおした内発的发展——

清水 展*

フィリピン・ビサヤ諸島の中心であるセブ市と狭い海峡をはさみ、橋で結ばれているマクタン島があります。地球一周の大航海を企てたマゼラン終焉の地です。1519年9月、5隻の船団に237人の船員を乗せてスペインを出帆したマゼランは、1521年4月27日、マクタン島で土地の首長のラブラブと戦い死亡しました。世界史においてマゼランは英雄です。しかしフィリピンにとってマゼランは、その後に始まるスペイン植民地支配（1571～1898）の先兵にほかなりません。だからマゼランを撃退したラブラブが国の大英雄となっています。

そのマクタン島にセブ国際空港があります。日本から空路で入ると、空港から車に乗って30分ほどで海辺に着きます。そこからバンカに乗りかえてヒロトガン海峡（深い海）を渡り、オラゴン環礁に入り、カオハガン島に着くまで、小一時間の快適な船旅です。カオハガン島は、周囲およそ2キロ、東京ドームほどの小さな島です。その島を崎山克彦さんが1987年に1,000万円ほどで買い、30年間のサラリーマン生活を引退した91年から住み始めました。崎山さんはダイビングとヨットが趣味で、たまたま休暇中のヨット航海の途中でセブ島に立ち寄った際、カオハガンの島のことを聞いて様子を見に行き、いっぺんで気に入ったそうです。91年以来、漁業などを生業とする500人ほどの島民と、奥さま、それに飼い犬と一緒に島の生活を満喫しています。

ご自身が書かれた本（『何もなくて豊かな島』『青い島の住む島』『ゆっくり生きる』など）で、10年以上も前に崎山さんのことを知りました。個人的な興味もさりながら（南の島の海辺で暮らしダイビング三昧の老後を送ること）、フィリピンを研究する者として強い関心を持ちました。崎山さんが報告す

る島での暮らしが、日本で一般的なフィリピンのイメージとは正反対で、まるで南海の楽園のようだったからです。

東京外国語大学 AA 研の宮崎恒二教授が代表をされた「高齢化社会と国際移住に関する文化人類学的研究」のメンバーとなり「フィリピンにおける日本人高齢者のロングステイ」の調査をする機会を得たとき、カオハガン島までインタビューに出かけました。崎山氏の島での暮らしぶりや島民の生活は、本に書かれているとおりでした。出かけていって初めて知って、びっくり仰天したことは、島民の多くがキルトを縫っていることでした。キルトのデザインや色使いに強烈な印象を受けました。そしてヘタウマ（下手なのに上手）というか、アート・ナイフに通じるような素朴な芸術性を、何人かのキルト製作者の作品に感じました。

客用ロッジに泊めてもらい、ゆっくり流れる時間のなかに身を置いてみたとき、キルトのなかに島の小宇宙がぎゅっと凝縮して縫いこまれていることがよく分かりました。キルター（縫い手）の瞳に映った島での生活の細部が、鮮やかな色彩と大胆なデザインで描きだされています。それは、キルターの想いや思い出が、心の底から直接に浮かびあがってきたような風景です。キルト作りをとおして、その図柄と色彩のなかに、各自が思い思いに精一杯の自己表現をしています。ヨーロッパ発のキルト作りが、大西洋と太平洋を越え、日本を経てカオハガンに伝わり、そこで根付き、花開きつつあることに、深い感動を覚えました。

ただし、アメリカや日本の技術や製法がそのまま使われているわけではありません。むしろカオハガン式と呼べるような自由でイメージーションにあふれたやり方で作っています。崎山さんのパートナーの順子さんが島に住み始めて、島人にキルト作りを教えたとき、初めは村の女性たちも興味を示し

* Shimizu Hiromu, 京都大学東南アジア研究所; Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

ました。けれども、基本が大切だからと、紙と定規と鉛筆を用意し、日本と同じように製図の基本をきっちりと教えようとしたら、「そんなのめんどくさいよ、それに難しすぎて私にはできない」と言って、とたんに興味を失くしてしまったそうです。

カオハガンに移住する以前、順子さんはキルト・スクールのハーツ&ハンズの校長をしていました。その日本式の教え方が受け入れられなかったとき、一度はあきらめました。けれども、クララという女性が一人だけ関心を示し、家でこつこつと自分なりに工夫してキルトを縫い上げました。それを見せにきてくれたとき、吉川さんはとってもうれしくなって、その一枚を記念に買い取りました。そしたら、お金になるのだったら自分もやりたいと、さっそく10人の女性が集まってきたそうです。

しかし、やはり彼女たちは定規や型紙を使わず、ハサミで直接に布を切るのですから、同じ形と大きさのパターンを作ることができません。そのためパターンを縫い合わせるときは、大きいほうを迷わずカットしたり、小さいほうに布を足したりして、辻褄を合わせてゆきます。だから出来上がったキルトは、すべてが曲がっていて、同じ形がないのが特徴です。創意工夫をこらし、パターンをひとつひとつ縫い合わせてゆくカオハガン式キルト作りの過程は、「アドリブのきいたジャズのような感覚」と同じだと、順子さんは説明します。

カオハガン・キルトの魅力は、一人ひとりが素朴ながらオリジナルな作品を作る素人芸術家だからです。しかしキルターにとっては、それが買い上げられて現金収入をもたらすことが一番の製作動機となっています。2008年には、シングル・サイズ349枚、ダブル・サイズ16枚、ストーリー・キルト4枚が製作され、その他の小品と合わせて全てを組合が買い取った価格の総額は250万円強となりました。島では、80人ほどがキルト作りをしていますから、単純に計算すると、キルター1人あたり3万円弱(15,000ペソ)の収入となります。島民の現金収入は月に5～6千円ほどですから、家計の大きな助けになっています。そのお金で、子供たちが隣の島の高校へ通うことができます(フィリピンの学制は、6年の小学校の後、4年のハイスクール、次いで4年の大学となっています)。

完成したキルトの一部は、カオハガン島を訪れ、ロッジに泊まる観光客がみやげに買ってくれます。大部分は、順子さんのネットワークを通じて日本で販売されます。売値は、買い取り価格のおよそ2倍です。売り上げの半額弱がキルターへ先払いされているほか、残りは材料となる布切れの共同購入費や、キルト小屋を維持管理するスタッフへの謝金、日本への輸送費・交通費などのために使われます。そうした経費が、2008年には200万円強かかりました。

売り上げのほぼ2/3がキルターと組合に還元されるという意味で、理想的なフェア・トレードということもできます。しかし、キルト作りを教え、製品の販売のために尽力されている順子さんの収入はゼロです。彼女にとっては、必ずしもフェアではありません。しかし、島の女性たちがキルト作りを愛し、自分たちの手で島の生活を良くしていつてくれるのが、我がことのように嬉しいといえます。

カオハガンのキルト作りは、小さな奇跡の物語です。以前ならば、島の女たちは、暇を持て余すと、小銭を賭けたマージャンをしていました。今は、マージャンをする時間を惜しんで、家のなかで、あるいはキルト小屋に集まって、あるいは風が渡って気持ちの良い海辺の小屋で、キルトを縫っています。お金を得る喜びに加えて、物を作る喜びや自身を表す喜びが合わさって、島での生活に張りが生まれています。キルト作りを通じて、物心の両面において彼女たち(今では少数ながら男たちもいます)ひとりひとりが豊かになり、自己実現がなされています。彼女たちの喜びは自分の喜びでもあると順子さんはいます。またそれは、調査と研究で30年あまりにわたり、フィリピンと係わってきた私自身の喜びでもあります。ともすれば、ギクシャクと問題を生じがちな日本とフィリピンのあいだの、心温まる交流の一例なのです。

キルト作りは、メイフラワーとともにイギリスからアメリカへと伝えられ、建国の初めから庶民の暮らしとともにありました。アメリカの東部から西部へと大陸を横断し、海を渡ってハワイへ、さらに日本へ、カオハガンへと、地球を回るキルトの旅が続いてきました。どの土地にあっても、パッチワークを縫いこむという手仕事のなかに、人はさまざまな

現 地 通 信

思いをこめながら時を過ごしてきたでしょう。国や時代を超えて、それぞれの土地で違う点と共通する点とがあるでしょう。文化の受容と換骨奪胎による

創造というダイナミックな過程の一例としても、カオハガンのキルトはとても興味深いです。